

豊かなコミュニケーションを図ろうとする子どもの育成をめざした外国語活動・英語科

1. 外国語活動・英語科で願う豊かな学びの姿

〔小6〕○今日は前回よりもたくさん英語を話すことができ、お客さんとたくさんコミュニケーションを取ることができました。お店の商品を作るのも、売るのも、買うのもすごく楽しかったです。○今日は2回目の英語活動のフリマでした。2回目になるとこの前わからなかったこともできるようになったからすごく楽しかったです。また、いつか学校じゃなくても、やってみたいと思います。

上記の感想は、中学校教員が小学6年生に外国語活動を行った際に、児童がふりかえり用紙に書いたものである。児童は積極的に英語を使って、友達とコミュニケーションを図ろうとただけでなく、同時に英語を使う楽しさも味わっていた。そして、「次は英語でこんなことを言ってみたい」「こんなことをやってみたい」という思いを多くの児童が感じることができた。

今年度から小学5、6年生のすべての英語活動は学級担任とALTとのチーム・ティーチングで行っている。また、小学校の外国語活動から教科としての英語へのスムーズな「学びのつながり」を図るために、外国語活動のカリキュラムを再検討し、新たな年間指導計画を作成し、実践を行っている。

中学校では、上のような思いや願いをもった児童が、教科としての英語の学習に取り組む上で、それまで音声では理解できていたことを文字として理解させ、そして、文法的なルールに則り、表現していく過程をとっていきけるような授業展開を行ってきた。附属中学校の全学年で毎時間取り組んでいるスピーチ活動で一番はじめに行った授業のふりかえりを紹介する。

〔中1〕○質問を考えるときに新しい表現が覚えられるからいいなと思った。聞きやすいように工夫をしたりするともっとスムーズにできると思った。○まだスピーカーが話している英語は簡単でわかりやすかったけど、質問を作ることが難しかったです。日本語ではすぐに（頭の中で）表現できるけど、少ない語い数で英文をつくることに苦心しました。自分の思っていることを早く英語で言えるようになりたいです。

また、スピーチ活動以外にも自己表現力をつけるための様々な活動を授業の中に取り入れたり、学期ごとにはまとめとしてのスピーキングテストを行っている。下はある授業での生徒のふりかえりからであるが、本部会が願う姿に一歩ずつ向かっていることがよくわかる。

〔中3〕○まだまだ文法の理解も会話の表現の仕方なども全く足りていないことがわかりました。もっと練習が必要だと感じました。○時と場合に応じた受け答えをすることはすごく難しいと思いました。自分の中にある言葉の引き出し、文章の引き出しからどれを取り出してどのようにつなげればいいのかとても考えさせられました。

本部会では「豊かな学びの姿」をただ単に基本的・基礎的な知識や技能が定着している状態を指すのではなく、他者とのかかわりを通して、それらを高め合い、探求心をもってさらなる自己の伸長を図る姿ととらえ、以下のように定義し、実践を行っている。

- 友だちとのかかわりを大切に、互いの考えや気持ちを伝え、それを尊重しあう姿
- 知的好奇心や課題意識をもって学び、自己の伸長を図る姿

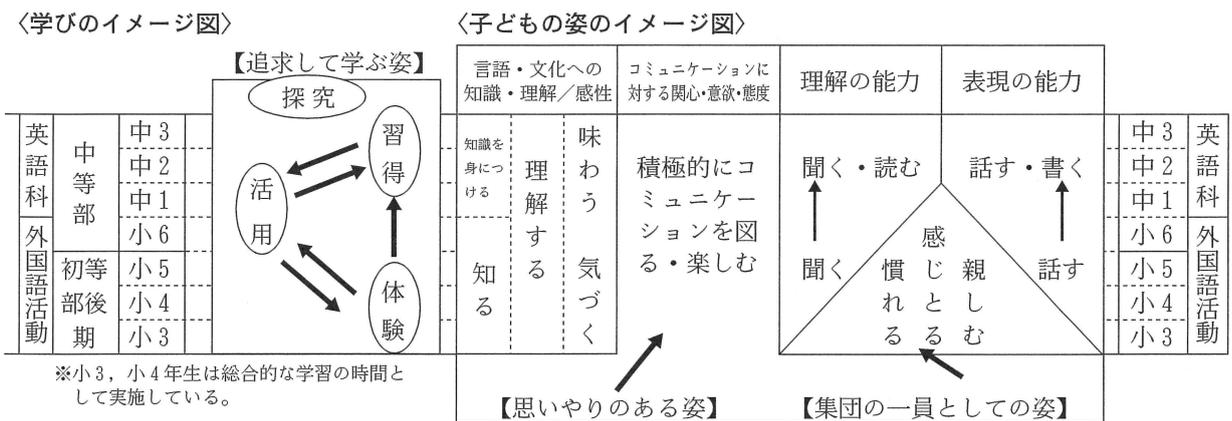
2. 昨年度までの研究の経緯

これまで本部会では幼小中一貫して大事に育てたい力として「豊かなコミュニケーション能力」を挙げ、研究を続けてきた。豊かなコミュニケーションを図るためには、まず、以下の4つの要素が必要であると考えた。

- ア 自分自身や伝えようとする事柄について、確かな認識をもち、それを表現できること
- イ 他者との違いを尊重し、その良さをあじわえること
- ウ 他者との共感的理解ができること
- エ これらを支えるスキルが身についていること

アは自己認識や自己を取り巻く文化への知識・理解に大きなかかわりがあり、イ・ウは他者とのかかわりを、違いと共通性の尊重の両面から見たものである。これらの3項目については、他者とのかかわりを大切にしたコミュニケーション活動を授業中に意図的に仕組み、教師はこれらの観点をもって子どもをとらえ、子どもたちにフィードバックして育成を図ってきた。エについては、小学校と中学校で教師のとらえを変える必要があった。つまり、小学校の外国語活動ではスキルの習得をめざすのではなく、体験の中で英語を使用・活用することを通して、その結果としてスキルが身につく場合もあるというように考える。そのため、教師のとらえとしては「できた／身についた」という見方ではなく、「コミュニケーション能力の素地としての言語への感性が育まれているか／英語に慣れ親しんでいるか」という見方でとらえをおこなった。それぞれの子どもの発達段階に応じて、「豊かな学びの姿」が立ち現れてくるような授業を構築し、その指導を工夫してきた。

「豊かなコミュニケーションを図ろうとする子ども」の育ちを発達段階によるイメージ図で表すと以下のようなになる。



本年度は昨年度までの幼小中一貫して大事に育てたい力に思考力・判断力・表現力の視点を加え、以下のようなことを大切にしていきたいと考えている。

- 伝えようとする事柄について、文法的なルールに則って考えることができること。(思考力)
- 場面、状況、相手の表情等に応じて言語材料を選択し、使い分けることができること。(判断力)
- 思考・判断を通して言葉として相手に伝えることができること。(表現力)
- 思考・判断・表現の一連の作業をスムーズに行えるスキルが身についていること。(基礎的・基本的な知識・技能)
- 他者との違いを尊重し、共感的理解ができること。(他者とのかかわりあい)

新学習指導要領では、小学校でコミュニケーション能力の素地を養い、具体的な表現・理解の能力については中学校で育成をめざすこととしている。また、小学校外国語活動と中学校英語科に共通する目

標として、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を掲げている。これは、本学校園の「めざす子ども像」のうちの「人とかかわりを大切に、共に伸びていく子ども」と通底している。新学習指導要領の完全実施に向け、小3・4については今後さらに検討する必要があるが、総合的な学習の時間等を利用し、初等部後期にあたる小学校3年生から英語にふれる活動を実施している。

3. 本年度の研究

(1) 外国語活動・英語科における思考力・判断力・表現力とは

今年度の研究を進めるにあたり、昨年度までの研究の考え方を基本に据えながら、一貫して育てていきたい力を思考力・判断力・表現力の面から見つめ直すこととした。そのためにも、本部会では、外国語活動や英語科における思考力・判断力・表現力とはいったいどういうこと（もの、状態、学習段階）なのかということを確認にしようと試みた。結論から言うと、以下のように定義することとした。

思考力：伝えようとする事柄について、文法的なルールに則って考えることができること。

判断力：場面、状況、相手の表情等に応じて言語材料を選択し、使い分けることができること。

表現力：思考・判断を通して言葉として相手に伝えることができること。

思考力とは、何か伝えようとする事柄を既習の文法的なルールに当てはめ、そのルールに従って考える力とした。これには、普段からの教師の的確な文法指導とそれによる生徒の文法的理解の定着つまり、基礎・基本の習得が重要となってくる。外国語活動では文法的な指導は行われないので、ここでの文法的なルールとは様々な英語表現やそれらを使う上での約束事を意味しているが、このように表記することにしたい。

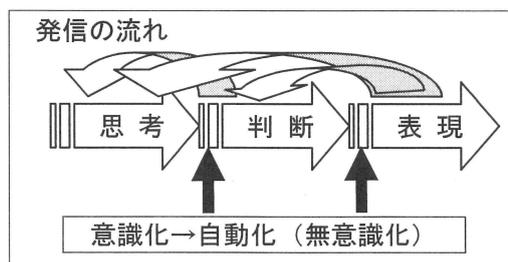
次に、判断力とは、思考の段階で出てきたいくつかの単語や表現のリストの中から適切なものを選択し、使い分けることができる力とした。つまり、伝える相手の表情や状況等のさまざまな要因を考慮し、その時点で一番適切であろうと思われる単語や表現を選び出す力である。

最後に、表現力については、思考・判断の段階を通して実際に書いたり、話したりすることによって相手に伝える力とした。しかし、ただ単に言葉を伝えるだけでなく、相手や状況によって、顔の表情や声の大きさ、トーン、ボディランゲージ、話す態度など自分の意見や気持ちを相手に伝えるときに必要な話し方もこの表現力に含まれると考える。

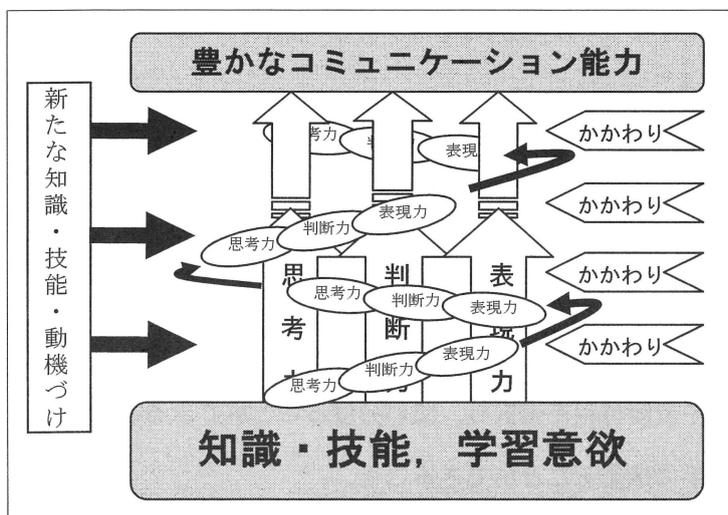
小学校の外国語活動で基本的な表現に慣れ親しむことによって、中学校の学習が円滑に進むと考えられる。例えば、「Can you ~?」という表現を外国語活動で「決まり文句」として触れたとすると、中学校で助動詞canを学習したときに「小学校でやったあの言い方」という形で想起することだろう。また、英語活動で「自分の英語が通じる」という成功体験を与えることで、「中学校で英語を勉強すれば、もっと言いたいことが言える」という意識をもたせる（動機づけ）ことも非常に大切になってくるであろう。

思考・判断・表現という発信までの流れを図に表すと右のようになる。それぞれがバラバラにあるのではなく、自分の考えや思ったことを発信するためには思考→判断→表現という一連の流れをとるのだが、もちろん逆向きに矢印が向くこともある。発信をするまでにある段階から次の段階へ移る場合もはじめは時間が多く必要であるが、練習を重ねることで少しずつ短くなっていくと考えられる。

また、コミュニケーションにおける思考力・判断力・表現力という場合、これら3つの力がバランス良くはたらいてこそ、「豊かなコミュニケーション」につながると考えられる。よって、授業においても単語テストや文法指導だけの授業や学習したての文法事項を使ってのインタビュー活動をして終わり



というような授業ではなく、今まで学習したことを使ってある程度まとまりのある英文を書く活動（キット作りや条件英作文等）や子どもたちがお互いに英語を使って質問し合う活動、そして、それらを発表する活動（スピーチ、インタビュー、発表会等）を積極的に取り入れていき、学習したことを活用していく必要があると思われる。



(2) 思考力・判断力・表現力を育てる上での有効なかかわり合いのあり方

上述のように本部会では「豊かな学びの姿」を友だちとのかかわりを大切に、互いの考えや気持ちを伝え、それを尊重し合う姿、知的好奇心や課題意識をもって学び、自己の伸長を図る姿と定義している。豊かな思考力・判断力・表現力を育成していくためには個人の努力だけに頼っていても効果は少ない。練習を一緒にしたり、自分のスピーチを聴いてくれたりする友達の存在が重要になってくるだろう。例えば、自分ひとりでは1つし

か思い浮かばない表現でも友達とのかかわりを通して使える表現が何倍にもなっていくことだろう。普段の授業からこのようなかかわりを意図的に作っていき、豊かなコミュニケーション能力の育成をめざしていきたい。

では、どのようなかかわり合いを授業の中でもっていけばよいのかであるが、これについてはどの段階でどの授業形態がよいというような明確な答え、例えば、判断力に重点を置いた授業ではペア活動が効果的である、というように必ずしもぴったりと合うようなものは無いように思われる。その時の生徒の状態（発達段階、理解状況、意欲、クラスの雰囲気など）や言語材料、そして、それまでの授業形態等によって、授業者がその都度変えていくほうが自然である。つまり、教師の授業力に頼る部分も大きいと考えられる。授業の進め方、専門性、子どものとらえ方等に関わる部分についても研究を重ねていきたい。

(3) 11年間の学びをどうつなげていくのか

新学習指導要領では小学校5、6年生から週1時間の外国語活動を実施することになっている。この目標にあるように、幼いころから外国語の文化や音声に触れ、積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿勢を育てていくことは大切なことであり、(1)で述べたように、これが中学校以降の英語学習にとっても有効にはたらいてくるように思われる。本学校園では数年前から時間数は少ないが総合的な学習の時間等を利用し、小学3年生から英語にふれる活動を行っている。本格的に外国語活動が始まるまでの幼稚園から小学4年生までもコミュニケーション能力の素地の育成を図る上で重要な時期であり、他の教科との連携を図っていく。

また、これまで小学校では主に授業の終わりに行っている「ふりかえりの時間」を、中学校ではスピーチ活動でのメッセージカード、ふりかえりシートや自己評価などを活用し、児童・生徒の学びのとらえを行ってきた。ひとつひとつのとらえを大切に、本部会の目指す「豊かなコミュニケーションを図ろうとする子ども」たちへとつながるようにしていきたい。

(文責 小澤 正則)

【参考文献】

- 横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校編 『「言語活動の充実」とは何か』三省堂
- 斎藤栄二「自己表現力をつける英語の授業」三省堂
- 千葉大学教育学部附属中学校『第45回中学校教育研究会 思考力、判断力、表現力を育む教科の指導』
- 上川教育研修センター『研究紀要第34号 思考力・判断力・表現力等をはぐくむ学習指導の在り方』